

八ヶ岳縦走

【報告者】岩谷、三好

【日時】2007年12月29、30日

【天候】曇り、雪

【参加者】平 L、長尾宏、和崎、坂井、田中政、坂本、長尾恵、樺島、藤末、三好、岩谷

コースタイム

(1日目) 9:58 小淵沢駅 = 10:45 富士見高原スキー場出発 = 16:30 編笠岳
= 17:00 青年小屋

(2日目) 6:45 青年小屋 = 10:30 権現小屋 = 12:35 青年小屋 = 16:45 スキー場
= 17:30 小淵沢駅 解散

報告

(1日目：岩谷、天候：曇り)

12月29日午前9時、うっすら肌寒い塩尻駅のホームでメンバーの到着を待つ。平組の鉄砲玉(無職)として、年末の仕事調整もなく博多を先発していた自分は、青春18切符をフル活用し、長野に前入りしていた。大阪や名古屋周辺の満員電車の中で、申し訳なさそうにザックを背負っていた頃の自分に比べれば、今の自分はなんと自信に溢れていることか。間もなく到着したメンバーと合流し、小淵沢行きの電車に乗り換える。無事合流できたと安堵している自分とは対比的に、車内でのメンバーの顔は心無しか疲れているように見えた。それもそのはず、つい一昨日までバリバリ仕事モードだったのだ。その足で夜行特急に乗り込んでいるのだから疲れがない訳がない。再び申し訳ない気持ちになった。そして、ここで田中さんが急きょ参加出来なくなったことを知る。八ヶ岳メンバーでのポッカが始まって以来、装備や雪山の知識の面に関して、田中さんにはいろいろとアドバイス頂いたし、今回の山行に対する思い入れは人一倍あったはずだ。田中さんの分まで頑張ろうと気が引き締まる。

9時58分、小淵沢駅到着。駅構内に荷物を降ろし、各々、準備を整える。程なく予約していたタクシー2台が到着した。5人ずつ2組に分かれタクシーに乗り込む。30分程の移動で富士見高原スキー場に到着。山スキーの経験もなければ、グレンデにも行ったことのない自分は、この雪の斜面を観るだけでもうお腹一杯気味だ。各自衣類を調整し、出発に備える。動き始めればすぐに温まるだろうと、下着に薄手のフリース一枚で出発した。「さぁ！いよいよ雪山だ！」という気合を他所に、登山道に雪は見

当たらない…。うっそうとした原生林の中、落ち葉を踏みしめ歩くこと 30 分、ちょうど体がポカポカしてきたところで、衣類調整のための休憩がとられた。高度は 1600m あたりか、平会長をはじめ、上は下着一枚という人も珍しくなく、藤末君にいたっては半袖だ。体から湯気が上がっている。今は遠慮するが、寒くなったら彼の後ろを歩くことにしようと決めた。この時点では、雪山に取り付いたというよりもハケ岳メンバーでポッカにきている感覚だった。再度コースを確認し、さらに歩を進める。これまで久住が人生最“高”の山だった自分が、気が付けば人生で一番高いところに来ていた。気温の低下がはっきりと体感できる標高約 2000m、ようやく雪が現れ、足元も滑りはじめたこの地点で、各自アイゼンと上着を装着する。本番前のアイゼントレに参加できず、アイゼンをつけての行動に不安がある自分はここで緊張のスイッチが入った。ややガニ股気味にバランスを取りながら歩くこと約 2 時間、樹林帯を抜けようやく展望が開けてきた。目指す編笠岳の頂上は見えないものの、振り返れば雪に覆われた山なみが見渡され、感動の声がもれる。しかし、ここからが大変だった。山頂直下のガレ場が雪で覆われ非常に歩き辛い。ピッケルで前方を小突き、恐る恐る足を伸ばす自分とは対照的に、トップに立つ会長の足取りは軽い。途中、トップを交代させてもらったが、20m も進まないうちにコースから外れるような有様だった。そんなこんなで息も絶え絶えの中「あと少し！ガンバレ！」という立て札を発見！視界が悪いので頂上は見えないものの、「あと少し」という言葉に奮起し気力を立て直す。その気力も衰えかけた頃、再度立て札を発見。「ガンバレ！もう少し！」…あまり内容の変わっていない立て札にもう心は動かされずただひたすら頂上を目指した。

16 時 30 分、編笠岳頂上を踏んだ頃にはすっかり息が上がっていた。標高 2524m。これから目指す赤岳には及ばないが、自分にとっての人生最高地点。残念ながら、ガスのため期待していた雪山の景色を観ることは出来なかったが、メンバーと一区切りの達成を祝い記念撮影。予定時間を過ぎていたこともあり、ここから青年小屋までの下りは、足元のガレ場に気を配りつつもやや足早に移動した。青年小屋には 1 組のパーティーが先着しており、我々は小屋の外にテントを張ることになった。設営したテントに荷物を運び入れた頃には日も沈み辺りは暗くなっていた。バーナーの火で指先を暖め、雪を溶かし夕食のためのお湯を沸かす。持ち込みの袋詰め食料の空気を抜いて、軽量化・縮小化を図っている長尾さんや、砕いたチキンラーメンに乾燥ネギを混ぜて持ってきている藤末君の工夫に脱帽しつつ夕食を終える。ここで長尾さん秘蔵の焼酎！と藤末君特製のお酒（失念）が登場！どちらも 40 度を超えているとのことで、一杯ずつ飲み終える頃にはほろ酔い気分になっていた。周りのテントも静かになった 20 時頃、明日への逸る気持ちを抑え就寝。

(2日目：三好、天候：雪)

～藤末さんのと同じで～

4:30に起床予定だったが、前日早めに寝たこともあり、4時過ぎ頃から誰からともなくモゾモゾと起き始め、朝食をとった。前日の内に作ったテルモスのお湯で各々ラーメンなりスープを作ってみたが、さすがのテルモスも極寒の山中でその温度を維持するのが困難だったとみえ、絶妙にぬるい。時間がありそうだったので、雪でお湯を作り入れなおし、アツアツのスープで暖まり、今日待ち構えているであろう試練への準備をする。

テントをたたみ、6:45に出発。30分もしないうちに、昨夜青年小屋に泊まっていた5人パーティーと出会い、目的地が同じだったので、お互いの合意で一段となってラッセルをすることにした。ピナクルメンバーに先頭のラッセルが回ってくる頃には、コースにトレースはほとんどないに等しく、速いテンポでラッセルを交替して進んでいった。長尾さんのアドバイスで2番目以降の人でラッセルした跡を踏み固め、なるべく後の人が歩きやすいようにしていく。しかし、進んでゆくとつれ風は段々と強まり、まず鼻と唇が寒さでジンジンと痛んでくる。唇はネックウォーマーなどでガードし、鼻は気合で我慢できたとしても、僕が一番手こずったのはなんと言ってもメガネ。唇をネックウォーマーなどでガードすると蒸気がメガネにつきまじり曇る。口は我慢、なんとしても目だけは...と自分に鞭を打つも、吹雪が強くなり、蒸気云々はおかまいなしにメガネが雪で使い物にならなくなった。仕方がないのでメガネをはずしてみたが、0.1もない裸眼の方がはるかにマシだったので、途中から愛用メガネに別れを告げた。気が付くと和崎さんも藤末くんも裸眼族に仲間入りしていたので、妥当な判断だったのだろう。

途中鎖場がある急峻な斜面を、ピッケルを山側に刺して身体を支えながら移動してき、しばらくすると10:30頃に権現小屋に着いた。5人のパーティーはその先にある権現谷に寄るといので別れ、ピナクルは赤岳へのルートを進んでいった。相変わらず吹雪はその力を鎮めることなく吹き荒れており、それでも懸命にラッセルを交替しながら歩いてゆくと、赤岳へ行くには降りすぎていることに長尾さんが気づき、方向を確認してみると、赤岳ではなく南西の三ツ頭へ向かっていた。すでに吹雪が激しく遠くの山の形などは全く見えなくなっていたため、途中北に行くはずの分かれ道を見落としたのだろう。そこから15分ほど引き返し、赤岳への分岐に辿り着いた。10分ほど休憩してから、気を取り直してさあ出発！ということで気合を入れなおして斜面を下って行くも、向かい風が尋常ではなく強まっており、メガネが曇るところか、目を開けない。目を開くとたちまち吹雪が矢のように飛んでくる。このときゴーグルを持っていたのが長尾恵さんだけで、それ以外のメンバーはもう歩けるような状態ではなかったため、長尾さんと会長の判断で、ここで撤退し、来た道を引き返すことにし

た。

さあ、後は来た道を降って帰るだけだ...と思って安心したら大間違い、なんともの数十分前に 10 人以上が踏み固めたトレースがすでに消えている。おかげで戻るべきルートすら明確に分からず、記憶を頼りに進んでゆくがどうも方角や山の形がおかしい。しかも、吹雪で視野が悪くなっているため、なかなか正規のルートを探し当てることができない。吹雪で体温は奪われ、道も見失うとなると、ベテランが冬山で遭難するのも分かる気がした。途中リカバーしながら何とか鎖場のあるルートまで戻ることができ、そこからは順調に来た道を戻ってゆくことができた。

12:35 に今日出発した青年小屋に到着し、小屋の中で短い休憩をとった。ここで、今日ピバグしても明日以降は寒波が到来して天候がよくなることは考えにくかったため、今日中に下山することを決定した。よし、今度こそ来た道を辿っていけば...と安心するのも束の間、編笠山へと登ってゆくと、とりあえず風が強い。特に編笠山から降っていくときには、岩の上をアイゼンで歩くためただでさえバランスが悪い上、暴風が吹きつけるため、風に身体をもっていられるのではないかと思うくらいだった。

森林限界を過ぎるとあとは穏やかなもので、アイゼンをはずしたため、滑らないように気をつけて降っていけばよかった。16:45 にゴルフ場へ着き、タクシーを呼び、小淵沢駅へ向かった。駅で立ち食いそば(うまい)を食べて身体を癒した後、翌日別の山にリベンジするグループ(長尾さん、坂本さん、樺島さん)、福岡へ帰省するグループ(平会長、和崎さん、坂井さん、長尾恵さん、岩谷さん、藤末さん)、東京へ帰省するグループ(というか僕だけ)に別れ、解散となった。

今回は登頂はできなかったが教訓なら三つある。

冬山は、天候によって大きくその姿を変える(身と目と鼻と口に沁みて分かった)。

装備はやはり大事(ゴーグルは買うべし)

そして、冬山は楽しい(少なくとも仕事のことはすこーんと忘れていた)。

以上!(長尾さん、誘っていただきありがとございました!)

メンバー感想

今回の八ヶ岳山行お世話になりました。

感想文と言う事なのでピナクルの報告の形式は略させていただきます。

身長 4 尺 3 寸 体重 1 7 貫 体脂肪率 21.6%の資料を基に冬山の特に着るものについての感想です。

私にとっての研究課題は着るもの(ウエア)特に重ね着についてでした。

行動時の暑さ、行動していないときの寒さに対してです。動くとき暑い汗が出る。動かないとき汗が冷えて冷たい。私の答えは上等のウールの下着に上等のヤッケ。あの稜線上の風雪に対して全く冷たなく暑くなく快適でした。ただ暫く20分くらい休むと冷たさを感じました。問題は手袋でした。フリースのインナーにゴアのオーバー手袋は指が痛くなって冷たかった。インナーはやはりウールが必要か。ミトンがいいと感じました。足は厚手のウールで靴さえしっかりしていれば問題なし。次に顔です。まともに当たる北風と雪に対して目出帽だが行動時息が苦しい。暑い暑いのは頭頂を覆うため熱が逃げないから。で、耳覆いと首覆いで寒さを防ぎ頭の天辺を出して暑さ対策をしようと考えた。最初はうまくいったがあの風と雪に見舞われると口元を覆った首覆いが凍って硬くなり顔面下部の保温がうまくいかない。次回行ければ首覆いの換えを使って交換してみたら思う。眼鏡はダメ、どうせ遠くは見えないので眼鏡を外した。ゴーグルが正解と思う。それと家を出るときに登山靴、ヤッケの恰好で汽車に乗るか。それだけで3kgは軽くなる。

いろいろ考えると楽しいし皆さんの工夫を教えてください。

暑さ寒さに強い体が一番いいとは思いますが。

【和崎】

今回は天気が悪くて展望もほとんどなく、行程的にも予定通りには行かなかったことは残念でしたが、それ以上に、初めてのラッセル体験、初めての雪中テント泊と個人的には良い経験ができたと思っています。

皆様どうもありがとうございました。

特にラッセルは、頭では大変なことは理解していたのですが、実際に経験して改めてその大変さが身に沁みました。膝下が中心だったので、ラッセルとしては楽な方なのでしょうが、それでもすぐに息が上がってしまい、たまに腰まで埋まってしまうと中々抜け出せなかったり.....

体力アップは当然のことながら、気持ちの面でも雪に負けない「強い気持ち」が必要だなと痛感しました。あと吹雪になるとあっと言う間に今まで歩いてきたトレースがなくなってしまう...雪山の「怖さ」を実感しました。

事前の清掃登山での宝満ボッカでは、ついて行くのが精一杯(ついていけない?)だったので内心不安だったのですが、11月~12月に時間を見つけてはボッカで宝満に登っていたせいか、幸いにも登山当日はそれほど荷物が重く感じることはありませんでした(実質山中2日間だけでしたが...)。冬山に限らず縦走のためには日頃からのトレーニングがやはり大事だと改めて感じました。

(今回初めてボッカやって良かったと心底思いました)

ただ荷物の軽量化については反省点も多く、次に生かしていきたいと思います。

今回の山行を通して、自分の中で体力／技術／装備．．．色々な課題が見えてきました。まずは色々な経験を積んで、自分なりの答えを見つけたいと思います。

雄大な雪山の景色を目指して．．．次も頑張ろうと思います。 【坂井】

今回の八ヶ岳では、日ごろのボッカの成果が改めて思い知らされた、私にとって初の冬山になりました。寒波の影響で天候も悪くなり、途中下山となりましたが、一度の冬山で沢山の経験が出来たことは次回の冬山への更なるステップと新たな期待へと繋がると思います。思っていたよりテントの中が暖かかったことが何よりよかったです。ぜひ、この体験をまだ経験されてないピナクル女子へオススメしたいと思います。

【長尾恵】

早く、“なんて美しいんだ．．” って連発するような雪山に巡り会いたいです。だってそういう報告書を読んで惹かれたんですから！

【樺島】

冬山はきつかった！！ばてた自分が恥ずかしい。
屈強な体を作ってまた冬山にチャレンジします。
せめて、冬山の良さがわかるまでは。

【藤末】